

文化芸術に携わる方々にお話を伺い、  
掛川市の文化振興のヒントをいただくこのシリーズ。

第26回目は、8月に掛川で開催する「歌舞伎プレセミナー」の

講師であり古典芸能解説者の

葛西聖司さんにお話を伺いました。



古典芸能解説者  
歌舞伎プレセミナー講師  
かさい せいじ

葛西聖司さん

## 客席からステージへの「踏み台」

東京の生まれ育ち、わたしのふるさとです。といっても私鉄沿線の住宅地。広い畑地もあちこちにあり、キャベツやネギの風景が広がるのんびりとした時代でした。

音楽大学の付属幼稚園に通ってはいても、楽器演奏が得意でもなく、小学校でも絵や工作の才能が自分にはないことは早くから自覚していました。でも映画や音楽を見たり聞いたりするのは人並みに好きな都会っ子。そんな私が中学に入るところ。劇場に通う楽しみを覚えられました。少しませていたのかも知れませんが、テレビに出ていた有名な女優や名高い歌手たちが目の前で演技し、歌っている。生の舞台の

魅力にとりつかれました。芸術座や新宿コマ劇場、明治座といった劇場です。定期券を持って電車通学をしていましたから上野の鈴木演芸場で落語など寄席演芸を楽しみ、日比谷の東宝劇場で宝塚歌劇も初体験。学校帰りに繁華街でひとり観劇をして帰宅しても、東京は安全な町。両親も公認です。しかし最大の転機は歌舞伎との出会いでした。

中学の担任が歌舞伎座に数人、連れて行ってくれました。知っている俳優が出ていたわけでもなく、内容も難解なものだったはず、でも思春期の少年には、その未知の世界が新鮮で良かったのでしょう。

自分から通うようになったのは国立劇場が開場したことが幸いしました。「通し狂言」という発端から結末まで見せてくれる上演スタイルだったので、わかりやすいし、なにより学生割引で映画よりも安く生の舞台が見られます。歌舞伎の名作に次々に触れ、好きな役者ができ始めると、もつともつと詳しく知りたくなります。また歌舞伎が原作の喜劇や伝統演劇の流れを組む新派、新国劇の名舞台にも興味をわき、大学時代は観劇の日々。名古屋の御園座、京都の南座、大阪の中座…と芝居行脚が青春。

歌舞伎に親しむと原作の能や文